

あとがき

今回はパブロ・ピカソのキュビズム時代の版画をすべておみせする展覧会である。ブロッホのピカソ版画カタログレゾネによると、ピカソは1909年から1917年にかけてキュビズムの版画を15点作成している。当画廊ではこれら15点の作品をここ3年かけて探し求め、集収することに成功した。かつて1985年12月に当画廊はイヴ・タンギー全版画展(30点)を開催したことがあるが、これはすでにそろっている作品をまとめてうまく入手したものであるが、今度のピカソのキュビズム全版画はひとつひとつ丹念に探し求めて手に入れたもので、ここによく完結して展覧会を開催することができるのは当事者としていささかの感慨を覚えるのである。

最後の一点「男と犬」カタログ No. 12 (Bloch レゾネ No. 28) がなかなか入手できず、やっと昨年12月に手に入れ、ホッとしたものである。昨年11月パリを訪れた際、フォス夫人とともにルイス・レリース画廊を訪問したことがある。ルイス・レリースさんは戦前、ピカソ、ブラック、レジェ等キュビズムの作家を世に押し出し、「キュビズムへの道」なる著書でも知られる有名な画商カーンワイラーの姪に当たる方で、ひょっとして探し求めている最後の一点があるかもしれないと思い、支配人のL氏にたずねた。L氏は当方にはないといい、私がすでに14点所有していると話すと、びっくりしてよく集めましたね、と祝福してくれた

のには私の方が今度は驚いたものである。それからしばらくして、私の友人がこの作品をパリで見付けてくれたのだから、不思議なものである。

ピカソの「キュビズム」全版画はその前の「青の時代」(サルタンバンクの時代)全版画とはその持つ意味が根本的に違うことを私としては強調したいのである。すなわち、キュビズムなくしてはその後の現代美術は成立し得ない。つまり現代美術の源泉なのである。その意味でこのピカソ・キュビズム全版画の持つ意味は大きいと言わざるを得ない。次に、サルタンバンクの版画作品は1905年に作成され、その後ヴォラールがその版を買い取り1913年に250部のエディションで発売されたもので、サインはなく、部数が多いために比較的入手しやすい。一方キュビズムの版画は「帽子の男」カタログ No. 13 (Bloch レゾネ No. 29) のみ455部と多いが、他は100部のエディションで、「アルルカン」カタログ No. 15 (Bloch レゾネ No. 32) の作品に至ってはわずか20部のエディションである。私はこの20部のエディションの作品を入手した時、ピカソのキュビズムの版画作品をすべて集めようと決心したのである。以上のようにキュビズムの全版画を収集するのはサルタンバンクの全版画を収集するよりは困難と言えよう。

消息通の話では、ピカソのキュビズム全版画を所有している美術館はパリのピカソ美術館ぐらいではないか、と言う。ニューヨークのMOMAの版画セクションはもっていそうな気がするが、確かめてはいない。グローバルにみて、現時点で、画廊ベースで所有しているのは恐らく当画廊だけではあるまいか、と秘かに私は思っている。分散している作品を時間をかけて丹念に集

収し、ひとつの意味のあるコレクションに仕立上げるのも画廊のひとつの仕事である、と私は思う。それが達成されたという満足感をただいま私は味わっている。

この展覧会のカタログ・テキストは本江邦夫、田中清光のお二人にご寄稿いただいた。本江さんには「晴れやかさについて」と題し美術評論家の立場から、キュビズムについて論じ、ピカソのキュビズム版画の意味を明らかにしていただいた。また詩人の田中さんには「キュビズムのわが国移入をめぐる管見」と題しキュビズムがパリで起った後、それがわが国にどのように紹介されたか、その理解はいかなるものであったか、当時の文芸誌等を通して追跡し、白樺派の功罪にも及んでいる。貴重な論稿をお寄せいただいたお二人に厚く御礼申し上げます。

なおカタログ No. 16 の作品「ピエロ」はキュビズムの作品ではないが、キュビズム完了直後の作品でエディションも20部と少なく大変珍しく優れた作品であるので敢えてこのカタログに収録したことを申し添える。

* * *

さて、ここで、当画廊の最近の状況、すなわち昨年の回顧と今年の展望を簡単に述べておきたい。展覧会の実績(1987)と予定(1988)は次表のとおりである。正直なところ過密である。今後ますますこの傾向は続くと考えられる。年間8~9回の展覧会に絞ろう、それが望ましいと考えてはいるがどれもこれも面白く捨てがたい企画であり、当分悩みが続きそうである。

去年は4回、外国に旅行した。1月にパリ、ベルリン、ロンドン、4月にニューヨーク、ロスアンジェ

ルス、9月にサンパウロ、ペルー、11月にベルリン、パリである。息子の周吾が6月にベルン、カッセル等ヨーロッパ、11月にニューヨークと結構飛び廻った。サンパウロは山田正亮さんが第19回サンパウロ・ビエンナーレ(コミッショナー:東野芳明氏)に日本代表の一人として出品されることになったので、この機会に地球の裏側へ行こうと、山田さんと一緒に出かけたものである。帰りにインカの遺跡、クスコ、マチュピチュ、ナスカを女房とともに廻った。インカの遺跡のすばらしさは申すまでもないことであるが、高山病にやられるやら、故障の多いセスナ機で肝を冷すやら、インカの音楽に心をうばわれるやらこの旅は忘れがたい印象を残した。

去年は文章を書くことに多くの時間を費したのも大きな特徴であった。今年5月に美術出版社から私は一冊の美術エッセー(アートビジネス関係を含む)の本を出版することを予定しており、昨年末にやっと最後の原稿「美術品寄贈の税務」を書き上げ、美術出版社の椎名節さんに手渡し一段落、ホッと一息ついたところである。数えてみるとカタログのあとがきを除き何と9編204枚(400字詰)の原稿を去年は書いたことになる。そのうち3編70枚は求められて雑誌等に寄稿したもので、残りはすべて書き下しである。おかげで8月の夏休みは全くつぶれてしまった。

そのなかでも印象的なもののひとつは「文学空間」に寄稿した「三好達治:はるかなるものみな青し」(50枚)で、小島信夫さんと山崎勉君の熱心なすすめで書いたものであるが、私としては一度どうしても書いておかねばならぬと思っていたテーマだけに、書き上げて積年の思いを果した感があり、このような機会を与えて下

さったお二人に感謝している。

次に「美術品寄贈の税務—その日米比較—」(33枚)には、苦勞した、何分専門外のテーマであるだけに、4人の専門家に意見をきき、それをつき合せて自分の言葉で書きあげるのに時間がかかった。税金の問題であるだけに間違っているのは全く意味がない。泥沼に足を踏み込んだような状況で、引くにひけず、辛じて何とか年を越さずに脱稿したというのが現状である。

さて今年であるが、当画廊は今年10周年を迎える。銀行(農林中央金庫)勤務20年、この美術業界で15年、そのうち、自分自身の画廊で10年となる。そして私はこの3月25日で満60歳を迎える。十年一昔、というが、ここ2,3年の速度は特に加速されてアツと言う間に時間がたっていくのを感じている。その節目に一冊の本を記念に出版できることをありがたく思っている。この本の大要は次のとおりである。

第一部 美術関係エッセー 12編

- 1) 絵をみて火花が散ったとき
- 2) 美術品寄贈の税務—その日米比較—
- 3) 現代美術館建設のすすめ
- 4) 画廊のしごと
- 5) 続：わが画廊経営実感論その一
- 6) 同上その二
- 7) ポロックの旅、ヴォルスの旅
- 8) クリスト：ブルーの花を夢む—「アンブレラ」プロジェクト—
- 9) 「瀧口修造と戦後美術」展に寄せて
- 10) 詩人：瀧口修造の絵画
- 11) 高橋満寿男絵画教室での思い出
- 12) 三好達治：はるかなるものみな青し

第二部 当画廊カタログのあとがき 40編

その他資料として当画廊の展覧会案内状85点、ポスター

18点、カタログ40冊(cat.No.21~60)の表紙を収録し、写真はカラー8頁(14点)、モノクローム約200点を掲載。総頁数300頁63年5月美術出版社から刊行の予定である。

5月下旬には西ベルリンで東京・ベルリン現代美術交流展(朝日新聞社、ゲーテ・インスティテュート共催)が開催されるが、当画廊では山田正亮さんの新作油彩、ドローイングをシュプラランガー画廊で開催の予定である。これは1984年に行われた東京・パリ現代美術交流展のベルリン版で東京・ベルリンのそれぞれ10作家・10画廊が交換展示を行うもので、東京ではシュプラランガー画廊の女流作家イナ・バルフスを4月に当画廊で展示する予定となっている。

6月下旬には戸谷成雄さんがヴェニスのパビヨンナール(コミッショナー：酒井忠康氏)に日本代表の一人として選ばれたので、ヴェニスで「森シリーズ」の彫刻が展示される。彼のユニークな木彫が彼の地でどのようにみえるか、評価されるか、私は楽しみにしている。

最後に、この1月から私の娘の真知(青山学院大学文学部卒、ロスアンジェルスのおキシデンタル・カレッジ1年留学)が、イッセイ・ミヤケ オンリミットを円満退社し、当画廊に勤めることになった。この7月にニューヨークへ行き、勉強がてら当画廊の仕事に専念することになる。私同様よろしくご指導ご鞭撻いただくようお願い申し上げます。

以上、今年も活気に満ちた忙しい年になるが、手際よく運営して参りたいと考えている。よろしくご支援のほどお願い申し上げます次第である。

1988年1月18日

佐谷画廊
佐谷和彦